

S8-4

遷延性意識障害患者における言語聴覚療法 ～中部療護センターにおける中間報告～

木沢記念病院 中部療護センター

○山森 亜美、豊島 義哉、辻井 知香子、奥村 由香、中村 美津、石山 光枝、
中山 則之、奥村 歩、篠田 淳

【はじめに】我々言語聴覚士は中部療護センター開設以来、約9割の患者に嚥下・認知・コミュニケーション訓練を行ってきた。今回患者の変化を認知面から評価し中間報告する。ここでの認知訓練とは外界刺激に対する能動的反応（瞬き、笑い、首振り等）をYes-Noとして意味づけコミュニケーション手段の1つとし、確立後高次脳機能障害にアプローチすることである。【対象】H15.1～17.3間に入所（平均35歳11ヶ月±17年4ヶ月、受傷から入所までの平均期間 1年4ヶ月±1年9ヶ月）され、嚥下訓練のみ19名、嚥下訓練+認知訓練10名、認知訓練のみ1名、計30名。【方法】東北療護センター遷延性意識障害スコア（以下スコア）評価とSTの認知評価（能動的反応・Yes-No反応・文字操作・発声発語・計算）でまとめた。【結果】スコア評価結果変化の現れた患者22名、ST評価では(1)嚥下訓練のみ（得点有）群：能動的反応確立、YES-NO反応出現(2)得点無群：スコア上変化を認めた症例があった。(3)認知訓練可能群：Yes-No反応確立、文字操作能力向上がみられた。FDG-PETにて糖代謝を分析した所、(3)は視床・帯状回の代謝が著明に低下する傾向にあり(2)は比較的保たれている傾向が認められた。(2)のようにST評価で改善を認めた患者は視床の代謝が改善している傾向がみられた。【まとめ】遷延性意識障害患者に総合的な訓練を続けることで、何らかの改善がみられた。嚥下訓練のみの重症例であっても嚥下機能の改善と共に認知面の若干の改善がみられた。能動的反応が可能となり認知面が中等度から軽症例まで改善する例が認められた。